
テラーホテル

零光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テラーホテル

【Nコード】

N2244B

【作者名】

零光

【あらすじ】

仲良し四人組の俺、木下、赤根、青木は皆で肝試しをすることになった。その舞台となるホテルはなにやら良からぬ噂があった。そこで起こる恐怖体験とは…

（前書き）

仲良し四人組の俺、木下、赤根、青木は皆で肝試しをすることになった。

その舞台となるホテルはなにやら良からぬ噂があった。

その仕込みをした金城、野口、桜はそれぞれ四人組の後輩で四人を驚かせようとホテルをお化け屋敷へと変身させていた。

しかしそこで起こる予想外な恐怖とは…

いつからか森の入り組んだ奥にある廃墟のホテル。

2階建てで窓は割れ、中には荒れ果てた残骸と、死者の亡霊が

「いる。つて噂ですよ。」

そう笑顔で話す木下とそれを半信半疑…いや、信じてないが聞いている俺と赤根、青木。

肝試しを言い出した青木がどこか良い場所は無いかと言いだしたのがきっかけだ。

だがそこは立ち入り禁止地区で、取り壊しも早いうちに行われるようだ。

「どうせ壊すんならその前に少しぐらい遊ばせてくれても良いじゃない」行きましようよ！」

後日深夜23時。その廃墟のホテルはもはや物音も立てずに静かに聳え立っている。傍にある一本の大きな木も回りの木と違い葉は無く、木の幹が曝け出されている。

肝試しの準備は青木では無く後輩がやったらしい。なんでも自分らも楽しみたいからとのこと…。

そいつらの名前は金城と野口、他に最終チェックに行った桜。

「結構手がこんでますよ！先輩達でも腰抜かしちゃうんじゃないっすか？」

にやにやと笑う金城。その傍で野口は懐中電灯の準備をしている。

「どうでもいいんだけどね。私がそんなに負けるはずないし。そういうば桜は？」

青木は自信満々だ。

桜は仕掛けの最終確認をいている事を話すと金城と野口は笑いながら

「…なんだかんだいつてあいつが一番やる気だったしな…」

懐中電灯のチェックを終え、それを各自に手渡している野口が言うには最初はそんな事して人を驚かせるのは好きじゃないと言っていたのに最後の方ではかなり念入りに計画を立てていたらしい。

「おもしろそうじゃないですか」ね！」

「…」

俺にそんな風に笑いかけてくる木下の笑顔が怖がっているようには見えなかった。

その後桜はしばらくしても帰ってこなかったので始めることにした。ルールは単純でどうやら2階の奥の部屋に置いてある札を取ってくればいいらしい。

「…いかにもありそうなルールだな…それで誰から行くんだ？」
結局俺と木下が先、赤根、青木が後に行くことになった。

「さっさと終わらせて帰るか…」

「斉藤さん…置いていかないでくださいよ。」

ちなみに斉藤は俺のことだ。

二人は中に入っていった。

- - - - -

「随分と寂れてるな。階段は…」

あたりを見渡すと不気味にあたりを照らしたいまつ。金城が用意したんだらうか？

「斉藤さん…何か凄いい冷氣が漂ってません…？」

冷氣？…確かに外の気温と比べると肌寒い。天井には明かりのつかないシャンデリア。

そしてそのシャンデリアの横に2階への階段があった。

それにしてもあまりにも単純な作りだ。ロビーがあつて、その横には部屋が1つ。たいまつが部屋の隅に1つずつ。計4つ。そのまま右方向に階段と今はもう動かないエレベーターがある。

「斉藤さあん…ここ本当に不気味です…早くその札とって帰りましよう…。」

俺の腕にしがみついている木下の手にも力が入っている。

確かにここは何かおきそうな感じがする…。

足早に階段を上ると左右に二つの部屋がある。ホテルと言うわりには部屋が少ない。

だがそんな考えも木下の服をひっぱる行動によってかき消された。

「どうした？」

木下に返事は無くただ指を指して部屋を見ている。

「!？」

その光景は明らかに想像を超えていた。

壁に血の様な物で魔方陣が書かれていて、その手前には大量の血のついた縄。

しかもその部屋の机の上に札は置いてある。まさかこれも演出？

だがあまりにも気配が生々すぎる。しかもこれだけの部屋しかないはずなのに桜の姿は見えない。

俺はすぐに札を取り木下を背負い、そのまま走って外に出た。

「あら？凄く早かったわね。そんなに簡単だったの？札だってしっかり持つてるし。」

青木はのんびり拍手を俺に向けていたが

「それどころじゃない!!!」

俺がいきなり叫んだせいで皆が黙った。木下は俺の後ろでシャツをひっぱりながら泣いている。

金城や野口も目を丸くして俺を見ている。

「ちょ…どうしたんだ？木下泣いてるし…何かあったのか？」

「おい！金城！桜はどうしたんだ！どこに行った！」

声を荒げてしまっているのは自分でも分かっている。ただ気になることが多すぎる。

「ま…待ってくださいよ！あいつはどうせどこかに隠れて…」

「じゃああの血で書かれた魔方陣は何だ？その手前の血のついた縄も！」

だが金城は口をぽかんと開けてからの鳴くような声で言った。

「そんな物設置してないっすけど…縄はドアが開いた時に上から落ちてくるようにしましたけど…血だなんて…なあ野口…」

そういう金城の問いかけに野口もただボーゼンとした顔で頷くだけだった。

だがドアは最初から開いていた。しかもあの血の量。並大抵ではない。

「くっそ！」

そういうと金城はホテルの入り口に走っていった。

だが…

「なんで鍵かかってんだよ！おい！！！」

なぜか入り口は閉じていてしかも鍵までかかっていた。
来た時からかかってなんかいなかった。それが今は閉じている。

「きゃああゝ！！！！！！！」

そんな時青木の悲鳴が聞こえた。指差す方を見ると2階の割れた窓

からこちらをみる人影…いや…あれはもはや人とはいえない…

灰色の布を身にまとい、その布には返り血がついている。肌は腐敗したような緑、目は月光の光を帯びて光っている。

まさに…幽霊。

立ち去れ…去れ…去れ…

かすかに聞こえる程度の声でそう放つと一瞬にして窓から消えた。

「…まさか…」

ぼろぼろになっているドアに体当たりをしてドアをこじ開ける。男4人で当たればさすがにドアも無残に倒れた。

だがそこで見た光景は先ほどとは違いたいまつの明かりは無く、一面の闇世界。

「野口！懐中電灯！」

金城はもう誰の手にも負えないくらいに動揺していた。

桜は無事なんだろうか…。電話をしても繋がらなかったと言う。

「赤根はそこで待ってる！青木と木下を頼む！」

そついい残すと俺と金城、野口は中に入っていた。

仕掛けを設置した二人がいるから何処に何があるかは大抵分かる。

階段を走って上り先ほどの幽霊がいた部屋についた。だがそこには一切何も無く、先ほどの部屋と対照的だった。

後ろには先ほどの血の魔方陣が書かれた部屋がある。

桜の姿は見えない…

だが先ほどは気がつかなかったが札の置いてある横に一冊の日記が置いてあった。

それを手に取り開いてみると…

10/9：昨日大好きだった人が交通事故で死んだ。もう会えない。僕も後を追おうと思う。

この建物の地下で彼女の遺体と僕を同じ場所に連れて行かせて…

「地下？」

野口と金城は互いに顔を合わせていた。

「…地下なんて何処にもなかった…」

「くっそ…桜…」

そういうと金城は思いっきり壁にパンチを喰らわせた。

とりあえず地下にいく場合は1階からだ。

そう思つて1階に戻るうと階段に目を向けると。

下では奴がこちらを見ている。

灰色の布に赤い返り血、濁った緑の肌、腐敗したような顔、焦点の合っていない目。

返せ…返せ…”さやか”を…返せ…

そう言うのと地面の下へ体がすり抜けていった。

”さやか”というのは恐らくさっきの日記に書かれていた交通事故

で死んだ人のことだろう。

「…なんだ…あれ…おい…桜…桜を返せ！！！」

そこには金城の叫び声だけが響いた。

地下…1階にあるエレベーターは止まっている。階段も一方通行だった…

…そういえば、1階にはもうひとつ部屋があった…。

いったい何がどうなっているのか。少なくともあの幽霊はこの日記の持ち主。…交通事故で…彼女を失った。

俺たちはその日記を持って、急いで1階の部屋に向かった。だがそこは、本が大量に置かれた図書室。

階段は見当たらない。

「…こういうときはどこかに下に行く為の階段が隠されている場合が多い…。」

野口の言うとおりここ以外に下に行く為の階段があると思われる場所はない。…だが…どこに…。

「くっそお！！！」バン！ボコ…

「え？」

金城が地面に思いつきり足を叩きつけるとその床が砕けそのまま下の階が見えた。

…床を壊す…か…。正当法ではない気がするがこのさい関係ない。なにせ床がそこまで腐敗していたということだから。

そのまま下に降りる。

とてつもない異臭が襲ってきた。

なぜならそこには1体の死体。そして…幽霊。さらにその足元には…

「桜！」

まさかとは思っていたが桜は奴に捕まっていた。そして地面には先ほどと同じ血の魔方陣。横の死体は…女性のような…さやかという人なのだろうか？

さくら…生き返る…この女の体…捧げる…

魂と思われる幽霊。そいつの目的は彼女を生き返らせること…桜の体で…

「ふざけんなあ！！！」

金城は思いつきり幽霊に殴りかかった。だが幽霊の体は半透明で金城はそのまま通り抜けてしまった。

愛する彼女の死を受け入れることが出来ないのだろう。
だが…桜を犠牲にさせることは出来ない…。

「おい…お前はこの日記の持ち主か。」

幽霊に話しかけてみる。…話が分かっている？

…そう…事故…許さない…許さない…

やはり、だとすればこいつの生命源はこの日記なんじゃないか？
そんな機転を使い俺はその日記を幽霊に投げつけた。

すると床の魔方陣が光り、幽霊はその腐った肌、灰色の布、全てを
床に落としその場から消滅した。音もなく、抵抗する気も無く見え
た。

横にいた彼女の死体も消えていった。

「桜！おい！桜！！」

金城がそう呼びかけると桜は目を覚まし、上体を起こした。

「あれ…？ここ何処？あ！肝試しの最終確認！！！」

「なあに寝ばけてんだ！お前幽霊に攫われたんだぞ！」

その言葉に桜は「冗談は止めて！　と言うだけだった。
その記憶は無いようだ…」。

「さっさとこんな場所から出るぞ…気味が悪い…」

地下からは外で待っていた赤根たちの力を借りて脱出できた。
こういうときに携帯は役に立つ。

「ほおーら、何暗い顔してんのよ！迷える幽霊さんを成仏させられ
たんだからいいじゃない！」

青木は呑気そうに言っているがそんな簡単に片付けられる問題か…

だがそのことについてはそれ以来触れないことにした。

なんせこの出来事について知っている人なんて俺たちぐらいしかないわけで、これ以上広めたりする必要はない。
そんな気がしたからだ。

後日そのホテルは取り壊し工事が行なわれた。

だがその時に地下室なんて見当たらなかったらしい。

あそこでの出来事は何だったんだろう。

自分達しか覚えている人はいない。

（後書き）

ホラーは書いたことが無かったので正直どのように書いたらいいのかわかりませんでした。

ですので恐怖を読者の皆様にどう伝えればいいのか…苦戦しました；
何はともあれ最後まで読んでくださりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2244b/>

テラーホテル

2010年10月11日12時44分発行